

## ソンディ法の因子反応とロールシャッハ法の 言語反応の関連性についての一考察

臨床心理学科 奥野哲也

### はじめに

言うまでもなく人間は、言語を媒介として、他の人と意思や感情を交流している。言語は、人間の意思や感情を伝える際の重要なものである。しかし他人との交流を想定しない、全く孤立した状況下での個人的な思考を想定した場合でも、思考自体は基本的には言語によって成立している。感情は基本的には言語を媒介とはしないで成立することは可能であるが、それを表現したり、他人に伝える際には言語という形を執っている。つまり感情も言語を媒介させているのである。いかなる場合も、人間には言語が必要なのである。

複雑な言語を扱うことで、人が人として成り立ち、他の哺乳動物の類をみない高度な文化や文明を発展させてきたわけである。人間社会の意思の伝達には、パプロフ理論でいう第二(次)信号系、すなわち言語が、基本的には必須である。音声を伴わない手話であっても言語が基本にあって、はじめて成立している。

臨床心理学の世界でも勿論、言語が必要である。しかし、人の心の世界を解明する手段は、言語のみではない。芸術一般は、音楽や絵画がそうであるように、言語を必須のものとして成立しているわけではない。また例えば行動がそうである。何気ないしぐさや、その時生じた行為を観察することで、心の中に起こっている事象を解明することが可能である。行動観察法は、こうしたことから成立をみているわけである。

心理療法の分野でも、言語が重要な役割を果たしている。特に臨床心理面接は言語を媒介として成立している。では、心理査定分野ではどうか。心理査定分野でも基本的には言語を媒介として成立しているが全てはそうではない。ただ適性を見る検査法は、基本的には「行為(作業)」が中心になっている。職業適性検査法や運転適性検査法等々がそうである。内田クレペリン加算作業検査法は作業場面の適性を図る目的で作られたが、研究を通じて単に作業適性だけでなく、その背後にある人の心の状態や心情、癖や性格といったことも加算作業に影響を与えていることを明らかにしたことで、心理査定法としての有用性を立証して、長く貴重な査定技法として活用された。日本で開発された内田クレペリン加算作業検査法は、現在ではその活用場面は減少しているものの、ある作業の適性や処理能力を単に明らかにするだけでなく、既述したように、人間の情動の動きを的確に把握する手段としては優れたものがあつた。

質問紙法の場合も、言語が必須になっている。また投映法の分野では、その中心的技法とされるロールシャッハ法やTATが言語を媒介としていることでも明らかのように、言語反応を中心としている。臨床場面ではクライアントから伝えられる言語反応を解釈することで、テストの解釈がなされ、クライアントの表面には表出されていない心の状態を明らかにする手法である。言語は抽象化が前提として成立している。

したがって検査者の教示は具体性が求められる。そうでないと得られた言語反応を明確に確定できない危険性が発生する。被験者の回答も、できるだけ具体的である必要がある。TATのように回答が物語、すなわち話の展開がある回答の場合は具体的であるが、ロールシャッハ法の場合は、TATのような長い反応ではないことが多いので、得られた回答を明確化して、被験者の回答として確定する作業が必要になっている。ある視覚刺激に反応することで生じた心像が抽象化して発せられるもの(言語的反応=言語)を、被験者から検査者が受け取り、被験者に質問をすることでより具体化して、それを更に抽象化(記号化)するのがロールシャッハ法である。こうした二重の抽象化を通じて、被験者に生じている心像を明らかにし、具象化することで明確にされている能力や現実感覚を、第三者にも分かりやすく把握できるようになっている。

言語反応によらない投映法は、一般には描画を中心とした、いわゆる芸術療法の分野に入るものが主になっている。したがって言語を媒介としないソンディ・テスト(衝動病理診断学)の手法は、描画などの技法を除くと投映法としては極めて異例の存在であるといえる。この論文では、こうしたソンディ・テストの特異なテスト学的意義を踏まえ、ロールシャッハ法に対峙して考察する研究であることから、以下の記載においては一般に使われているソンディ・テストではなく、臨床心理査定法のひとつとして意義づける点からも、ソンディ法と記載することとした。

## 調査の目的および方法

この研究では、投映法の代表的な技法である、言語反応を中心にして成立しているロールシャッハ法と、基本的に言語反応に依らないソンディ法とを対応させてみることで、より深い解釈の可能性とソンディ法の臨床面における幅広い活用の可能性を追求することを目的とした。

こうした分野の研究については、Bohm, E (1953, 1966)がソンディ法とロールシャッハ法についての関連性を探る研究を発表しており、また大塚義孝(1968a, 1968b, 1974)は、ロールシャッハ法の特定の指標とソンディ法の特定因子に関連があることを明らかにしている。大塚は、例えばロールシャッハ法における食べ物反応を多く示す者は、依存性や口唇愛傾向を意味するソンディ法のm+因子を多発しやすいことを明らかにしている。

今回の研究では、非行少年を対象にロールシャッハ法とその直後にソンディ法を実施して、それぞれの反応を比較検討した。なおロールシャッハ法については、すべての図版(第1図版から第10図版)を対象とすると反応が多く、内容も多岐にわたる可能性があり、本論で問題としている言語反応と選択による因子反応の比較という焦点が分散する危険性もあるので、この研究では、ロールシャッハ法の第1図版のみと1回法によるソンディ法とを比較対照した。なお検査実施については、ロールシャッハ法は正規の方法で、第1図版から第10図版まで実施している。ソンディ法は3回から10回の複数回数を実施しているが、今回直接的な比較としたのは、ロールシャッハ法実施直前に実施したソンディ法1回を対象として比較研究している。

調査の実際

事例1：男子18歳（知能：普通）

ロールシャッハ法（第1図版） 片口式（ ）：質問吟味段階での反応

7"△	何かなあ・・・身体の・・・人間の骨・・・肋骨みたい （肋骨みたい。組み方が・・・）	dr F干 At Bone
△▽（図版回転）		
45"△	何かの虫・・・あと分からん （d3+d5 ツノと頭のとっぺん）	d F± Ad
1'00"▽	かぶと （ここ出とるし・・・かぶる兜）	WS F± Crown
1'45"	（終了）	

ロールシャッハ法直前に施行した事例1のソンディ法反応

衝動	S		P		Sch		C	
因子	h	s	e	hy	k	p	d	m
前景像VGP	0	-	±	-	-	+	0	+!
理論的補償像ThKP	±	+	0	+	+	-	±	-!
実験的補償像EKP	±	±	φ	-	+	+	-!!	φ

事例1のテスト反応の考察

ロールシャッハ法では、かなり強い不安感が認められている。全体反応を避けて、小さな部分に固執し、最初の第1反応は特殊区分反応部分に出現している。その挙句に無気力な反応を招いている。「人間の骨」という内面に強い不安や恐怖感があることを示す反応である。現実適応状態が極めて不良であることを反映している。続いて「虫」という自我の萎縮した、気力の乏しい内容を示している。著しい気力の低下と同時に、精神的退行も意味していると考えられる反応である。そしてやっと全体反応が出せた時には、「兜」という防衛的な反応を出している。強い不安や動揺と自我防衛の硬さ、それも「兜」という攻撃性を内在させた自己隠蔽・防衛が示されているのが特徴である。

これらロールシャッハ法から理解できることは、  
 ①内面には強い不安や恐怖感があり、心情の安定も乏しい  
 ②気力の乏しい、精神的な疲労感や無気力感が見られる  
 ③一方対人場面では、攻撃性を秘めた硬い防衛的構えを示している  
 といったことが示されている。

ソンディ法では、次の3点が特徴的な反応として出現している。

- ①心気症的傾向（P+-・Sch-+：VGP）
- ②消極的で活動性の低下や意欲の低下、男性性の欠如（S0-、S±±：EKP）
- ③固執・執着・融通性のなさ、男性性の強い抑圧（d-!!：EKP）

こうした特徴を中心に解釈すると、強い男性

性が発揮できず、自信に欠け、不活発で、心情面の不安定傾向がみられる。感情をあるがままのものを出すことができないためにもどかしさやいらいらした気分にとらわれやすく、不安な心情が生じている。その結果、自己隠ぺいの・防衛的で、内に籠りやすい状態になっている。また柔軟に周囲に適応できにくく、融通が利かないでいる。社会性の乏しさが認められる反応となっている。

またロールシャッハ法によるテスト方式では、記号化はできないが、被験者が一番最初に発した言葉である、「何かなあ・・」という言

葉は、穏やかではあるが、力や活気のない状態を示しており、ソンディ法ではSベクターの低下、つまりこの事例に即していえば、直前に施行したソンディ法の対応する反応では、S0-やS±±EKPが対応している。

上記のようにロールシャッハ法とソンディ法には、事例解釈の上で共通した要素があることが明らかである。

事例1で出現したロールシャッハ法における言語反応とソンディ法における因子反応で、解釈上対応すると考えられる点を対比的に整理してみると、以下のようになる。

事例1のロールシャッハ法とソンディ法の対比的要約表

ロールシャッハ法による言語反応	ロールシャッハ法の言語反応が意味するもの	ソンディ法による因子反応と意味
何かなあ・・身体の・・・人間の骨・・肋骨みたい(肋骨みたい。組み方が・・) dr F干 At	強い不安、強い恐怖感情、心気状態、強い不安を抑制しようとする傾向	P±-・Sch-+ (罪業・刑罰不安、神経症状態、心気妄想傾向、体感異常、内面の不安を抑制しようと緊張する)
何かの虫・・・あと分からん <d3+d5 ツノと頭のとっぺん> d F± Ad	活動エネルギーの低下、無気力状態、疲労感、精神的退行状態、意欲のなさ	S0-・S±±EKP・C0+! (不活発、意欲低下、無気力、消極的、状況依存傾向)
かぶと <ここ出とるし・・かぶる兜> WS F± Crown	自我防衛、攻撃性の抑圧、硬い構え 自己保全への独善的な構え 強い男性性の憧憬 保守的で蒼古的傾向	hy- (EKPも同じ)・d-!! (自己隠ぺい、柔軟性の欠如) Sch++EKP (自己中心的で独善的な硬い構え) d-!! (強い男性性の抑圧) C0+!・d-!! (古い対象への固着と依存)

注：EKPとあるのはEKPでの反応

事例2：男子18歳（事知能：普通上）

ロールシャッハ法（第1図版） 片口式 〈 〉：質問吟味段階での反応

なんだこりゃ！ 10"△ かぼちゃ！・・ 〈半分に切ったところで、ここが（S）種のところ〉	WS F± PI Food
15"▽ 土偶・・〈顔、手、足、これが（S）目だと思う〉	WS F± (H) Antiquity
そんなところ・・・・・しかし、まあ・・・・・ 40"▽ 冠みたい・・〈形が似ている。抜けているところが（S）、冠にあるところとそっくり〉	WS F± Crown
あとない・・・・・50"（終了）	

ロールシャッハ法直前に施行した事例2のソンディ法反応

衝 動	S		P		Sch		C	
因 子	h	s	e	hy	k	p	d	m
前景像VGP	+	0	+	-!	-	+	-	+
理論的補償像ThKP	-	±	-	+!	+	-	0	-
実験的補償像EKP	-	+!	0	φ	±	+	±	0

事例2のテスト反応の考察

ロールシャッハ法では第1反応で、「かぼちゃ」といった食べることが可能な植物反応、つまり食物反応が出現している。ロールシャッハ法で食物反応が多発することと、ソンディ法で口唇愛傾向や依存欲求を意味するm+因子、もしくはm+!反応などと関連性が高いことは大塚（1974）が明らかにしており、依存的傾向が認められる。

また第2反応の「土偶」については、蒼古的で退行した要素を示しており、古い原初的なものへ執着・依存する保守的傾向と、状況に不適応感を伴った不安と被害念慮の存在を意味していると考えられる。

そして第3反応で「冠」が出現している。これは事例1に出現した「兜」という防衛的と執

を一にする反応が見られるが、「兜」に較べると攻撃性が強く内在されたものではなく、むしろ権威や自我拡大的な顕示性を周囲に示すことで、自分を強く大きく見せて、自我防衛を図ろうとする内容となっている。しかし内面には強い不安や動揺が存在することが、すべての反応にS（空白部分反応）を伴っている出現していることで明らかである。つまり「虚勢を張っている」状態にあることが理解される。

つまりこれらロールシャッハ法の結果が意味するところは、

- ①依存的な構えがあり、積極的な態度に欠けた古い心情や対象に執着する傾向がある
- ②虚勢を張りやすい要素があるが、内面には不安や動揺が生じやすい傾向がある
- ③内面の不適応感を伴う不安や被害感情を防衛

して、対人場面では虚勢的な行動や、強い自己顕示的な構えを示しやすい傾向があるといったことを意味している。

一方ソンディ法では、

- ① 小心で、傷つきやすい心気症的傾向がある (P + - · Sch - +)。
- ② 幼稚で退行しやすい、甘えっ子な要素もあるが、同時に感情混乱が生じやすく、周囲への不平や不満も秘められて、内在した攻撃性も持っている (S0 + · m +, e0 · S - + ! EKP, hy - !)。
- ③ 心情は不安定で、いらいらしやすく、不安・緊張など動揺しやすい傾向が認められる (e0 · Sch ± + · C ± 0 EKP)。

などが認められている。

またロールシャッハ法によるテスト解釈方式では記号化できないが、被験者が第一番に図版を見て発した言葉、すなわち「なんだこりゃ!・・・」という子どもっぽい歓声に似た、活力や心の躍動を反映していると考えられる言葉は、ロールシャッハ法の直前に施行したソンディ法で表現すれば、S + 0 (幼稚さ)、s + ! (積極性、活気・攻撃性)、m + (依存・情愛欲求)として理解することができる。

以上のような点を要約して、事例2で出現したロールシャッハ法における言語反応とソンディ法における因子反応で、解釈上対応すると考えられる点を事例1に倣って対比的に整理してみると、以下のようになる。

事例2のロールシャッハ法とソンディ法の対比的要約表

ロールシャッハ法による言語反応	ロールシャッハ法の言語反応が意味するもの	ソンディ法による因子反応と意味
かぼちゃ!・・・ 〈半分に切ったところで、ここが(S)種のところ〉 WS F± PI Food	口唇愛傾向、依存欲求。	m + (依存、甘え、口唇愛欲求)
土偶・・・〈顔、手、足、これが(S)目だと思う〉 WS F± (H) Antiquity	精神的退行、幼稚さ。 古い対象への依存心や執着傾向。 生き生きとした人間への関心の乏しさ。抑圧された不安や緊張。逃避。	m + · S + 0 · C ± 0 EKP · Sch - - · Sch ± + EKP (依存、甘え、幼稚、退行、内的不安と緊張、消極的態度、一時的激情と現実適応への努力)
冠みたい・・・〈形が似ている。抜けているところが(S)、冠にあるところとそっくり〉 WS F± Crown	権威的構え。権威への憧れ。 虚勢、自我防衛的傾向	p + (VGP · EKP 共に) · hy - ! (自我拡大的構え、自己隠べい)

注：EKPとあるのはEKPでの反応

事例3：女子19歳（知能：普通下）

ロールシャッハ法（第1図版） 片口式 〈 〉：質問吟味段階での反応

14"ハ	蝶ちよ 〈全体だよ。目とか尻尾。白いのは（S）模様だと思うし、蝶ちよの柄。 向こうから来るのを見てる。大空に羽ばたいている弱っちい蝶ちよ〉	WS FM±FK A P
30"〈	兎と兎が戯れている 〈顔、耳、脚。遊んでいるような・・・真ん中は、何でもない〉	W FM± A
もうないよ	55"	

ロールシャッハ法直前に施行した事例3のソンディ法反応

衝 動	S		P		Sch		C	
	h	s	e	Hy	k	p	d	m
前景像VGP	+	±	0	-	-	0	-	+!
理論的補償像ThKP	-	0	±	+	+	±	+	-!
実験的補償像EKP	-	φ	+	+	-	-	-	0

事例3のテスト解説

ロールシャッハ法では、第1反応に「蝶ちよ」というポピュラー反応を出している。しかしその内容は、「大空に羽ばたいている弱っちい蝶ちよ」と反応している。広い大空という自由な空間であるが、自由に羽ばたく楽しさと、ただ一匹の蝶が羽ばたいているという不安な感じと、「弱っちい蝶ちよ」といった弱小感を反映させている反応となっている。家庭から遠く離れた大都会での、自由を求めて生きる中に楽しさと共に言い知れぬ不安で、寂りょう感を漂わせた、この事例の現在の当てのなない心情を投影していると考えられる反応である。

また第2反応では、「兎と兎が戯れている」といった幼稚さを含んだ子どもっぽい反応の中に、人間的な温かさを求め、幼児期への憧憬も含んだ反応となっている。

つまりこれらのロールシャッハ法の結果が意

味するところは、

- ①何ものにも束縛されない自由な世界を求める心境
  - ②しかし周囲から孤立した不安な心情があり、自信が持てずに絶えず不安定である
  - ③幼稚で子どもっぽいところがあり、快樂追求的な状況にいる
- といったことが分かる。

またソンディ法では、

- ①小心、気弱で傷つきやすいところがあり、自信が持てず、心気症的な傾向がみられる（P0 -・Sch -0）
- ②幼稚さがみられ、甘え子で、依存的欲求が強い（C -+!, h +, P ++EKP）
- ③劣等意識が根底にあり、普段は目立たないおとなしいところがあるが、些細なことで緊張したり動揺しやすく、情緒的安定に乏しい要素がある（P0 -、Sch -0、Sch - - EKP、

S+±)  
 といったところが認められる。

以上のような点を要約して、事例3で出現したロールシャッハ法における言語反応とソンの

ディ法における因子反応で、解釈上対応すると考えられる点を対比的に整理してみると、以下のようなになる。

事例3のロールシャッハ法とソンのディ法の対比的要約表

ロールシャッハ法による言語反応	ロールシャッハ法の言語反応が意味するもの	ソンのディ法による因子反応と意味
蝶ちょ 〈全体だよ。目とか尻尾。白いの は(S)模様だと思うし、蝶ちょ の柄。向こうから来るのを見て る。大空に羽ばたいている弱っ ちい蝶ちょ〉 WS FM±FK A P	幼稚さ、子どもっぽさ 自由な気楽さを求める心情と、孤立 状況や孤独感が示されている。 弱小感、空虚感 不安感や寂しさ ポピュラーな多発反応	m+!・C-0 (依存・甘え) P0-・Sch-0 (小心・心気傾向) h-EKP・S+± (孤立と心的動揺、不安傾向) Sch-0・Sch--EKP(抑制・防衛) S+± (情緒の動揺が表面化) m+! (孤立することへの強い不安)
兎と兎が戯れている 〈顔、耳、脚。遊んでいるよう な・・・真ん中は、何でもない〉 W FM± A	幼稚さ、子どもっぽさ 快樂追求的	C--+!・C-0 EKP (情愛欲求・依存欲求)

注：EKPとあるのはEKPでの反応

事例4：男子15歳 (知能：普通)

ロールシャッハ法 (第1図版) 片口式 〈 〉：質問吟味段階での反応

13"△	化け物 〈見たくない! 顔みたいな感じ。薄気味悪い、色が。動物の化け物〉 WS FC'± (Ad)
59"◁	島みたいな崖。海にあるじゃん! 水に影が映っている 〈水から顔を出している島。影が水に映っている。下のほうが少しボケているから 映っていると思った。風景は好き。この先っばから飛び降りて死んだりする〉 W FK干 Lds
1'15"	(終了)

ロールシャッハ法直前に施行した事例4のソンのディ法反応

衝 動	S		P		Sch		C	
因 子	h	s	e	hy	k	p	d	m
前景像 VGP	0	0	±	±	-	+	-	-
理論的補償像 ThKP	±	±	0	0	+	-	+	+
実験的補償像 EKP	±	-	+	φ	+	+	-!	+



事例4のテスト解説

ロールシャッハ法の第一反応では、早い段階で「動物の化け物の顔」という情緒面の強い不安と感情的混乱が出現している。しかしやがて「水に映る島」という比較的穏やかな、距離感のある反応を示すことで不安を減少しようと図っているように思われる。だがそれは質問段階で、自殺を連想させる情景となっており、結果的には内面の不安が露出するなど、うまく成功しているとは言い難い状況にある。

つまりこれらのロールシャッハ法の結果が意味するところを要約すると、

- ①強い不安があり、その結果、感情的な混乱が生じやすい傾向がある
- ②活動力の減少やエネルギーの低下がみられ、

自殺企図の危険性を示唆している  
といったことが分かる。

またソンドイ法では、

- ①エネルギーの低下が見られ、無気力・消極的態度があり、現実から遊離した逃避の状態にある (S00、C--、S±-EKP)
- ②衝動的で、いらいらした気分支配されており、感情的混乱が生じやすい (P±±) といった傾向が示されている。

以上のような点を要約して、事例3で出現したロールシャッハ法における言語反応とソンドイ法における因子反応で、解釈上対応すると考えられる点を対比的に整理してみると、以下のようになる。

事例4のロールシャッハ法とソンドイ法の対比的要約表

ロールシャッハ法による言語反応	ロールシャッハ法の言語反応が意味するもの	ソンドイ法による因子反応と意味
化け物 (見たくない! 顔みたいな感じ。薄気味悪い、色が。動物の化け物) WS FC'± (Ad)	強い不安、感情的混乱、焦燥感生じている恐怖心を回避しようと緊張している	P±± (感情的爆発の危険性、不安をはらんだ強迫傾向と緊張状態) C-- (現実からの逃避・現実回避)
島みたいな崖。海にあるじゃん! 水に影が映っている (水から顔を出している島。影が水に映っている。下のほうが少しボケているから映っていると思った。風景は好き。この先っぽから飛び降りて死んだりする) W FK干 Lds	エネルギーの低下 活動力や意欲の低下 現実逃避的 自殺企図の危険性	S00・S±-EKP (エネルギーの低下、消極的態度、気力や意欲低下) C-- (現実逃避、目標喪失)

注: EKPとあるのはEKPでの反応

事例5：男子19歳 (知能：普通下)

ロールシャッハ法 (第1図版) 片口式 〈 〉：質問吟味段階での反応 [ ] 検査者の言葉

5"ハ	これは蝶です。 〈全体が蝶に見えた。羽をバタバタしている。飛んでいる感じがした〉	W FM± A P
18"ハ	蟹に見えます。 〈この部分 (d1) が蟹に見えた。他はまったく関係ない。蟹の角の先に見えた。角を立てた感じ。角を立てた状態である。部分的にそこだけが見えた。〉	d F干 Ad
	それだけです。[よく見てください]	
56"ハ	こうもり。 〈全体ということではないが、羽と目の部分が特にこうもりに見えた。夜行性の動物に見えた。夕方から夜にかけて飛び回る。羽が似ている。〉	W F± A P'
	それだけです。 1'4"	

ロールシャッハ法直前に施行した事例5のソンディ法反応

衝 動	S		P		Sch		C	
因 子	h	s	e	hy	k	p	d	m
前 景 像VGP	+!!	-	-	-	0	±	+	-
理論的補償像ThKP	-!!	+	±	+	±	0	-	+
実験的補償像EKP	φ	+	-	±	±	0	±	-

事例5のテスト解説

ロールシャッハ法では、図版を見た直後に「蝶」という平凡反応を示している。そして反応吟味段階では、「羽をばたばたして、飛んでいる蝶」という運動を伴う反応を示しており、運動能力の高い心的状態が伺われる。その後、部分的な先端の形態だけから「蟹の角」という繊細で過敏さを秘めた攻撃的反応を示し、その直後に反応を止めて図版を検査者に返そうとしている。すばやい防衛行動と解釈される。それを検査者から止められて、もっとよく見るように指示され、開始から56秒経過した時点で「こうもり」といった、多発しやすい平凡反応を示している。しかしこの「こうもり」に対する説明は詳細にわたっており、あまり一般には指摘

のない「目」という微細な部分に着目しているし、加えて「夕方から夜にかけて飛び回る、夜行性のこうもり」という、主に夜間に行動し、夜間に活動する動物の反応を得ている。つまり一般の動物とは逆の生活形態を持つ動物の運動反応を示している点に注目させられる。この事例では、まさしく「夕方から夜間」にかけて連続的に問題行動を重ねていた状況があり、この反応こそ事例の自我像的反応ではないかと考えられるものである。しかもこの反応が、第一反応ではなく、第三番目の、しかも検査者に促されてからやっと出現している点も特徴的であると言える。

つまりこれらロールシャッハ法の結果が意味するところを要約すると、

- ①すばやくて、高い活動性を持っている。
  - ②多少、現実回避的で自己隠蔽の傾向が認められる。
  - ③被害感があり、そのため時には攻撃的な構えを示すこともある。
- といったことが分かる。

またソンディ法では、h + !! といった個人的情愛欲求の強い反応が出ているが、m 因子では前景像、背景像共に m - といった母性的情愛を拒絶する矛盾した反応であるなどの特徴が認められる。また前景像は Sch 0 ± といった女性的自我であるのに対し、背景像では前景像とは逆の Sch ± 0 といった男性的自我を示すなど、統一性を欠く反応を示しているところに特徴がある。また背景像では hy ± · k ± という過度に抑制的傾向を意味する反応があり、結果的には抑制を欠きやすい行動傾向の存在が示唆される反応であるが、前景像では P - - といった感情表出を抑制する防衛的・閉鎖的の反応が示され

ているなど、矛盾や対立的傾向を示す結果が得られている。これらソンディ法を要約すると、

- ①情愛葛藤がみられる (h + !!, m - VGP · EKP)
  - ②前景像では孤立感から受容を求める女性的自我像 (Sch 0 ±) が認められるが、背景像で周囲から離反し、自立する主体的、積極的な男性的自我像 (Sch ± 0) が示されている。
  - ③背景像では s + といった積極性や攻撃性を意味する反応があり、また hy ± · k ± といった過度に抑制的になろうとしている反応があるなどしており、心的安定を欠きやすい要素があることが理解される
- というソンディ法結果が示されている。

以上のような点をまとめて、事例5で出現したロールシャッハ法における言語反応とソンディ法における因子反応から、解釈上対応すると考えられる点を対比してみると以下のようなになる。

事例5のロールシャッハ法とソンディ法の対比的要約表

ロールシャッハ法による 言語反応	ロールシャッハ法の 言語反応が意味するもの	ソンディ法による 因子反応と意味
これは蝶です (全体が蝶に見えた。羽をバタバタしている。飛んでいる感じがした) W FM ± A P	活動的、積極的 平凡反応に逃げる防衛的要素	s + EKP (活動的・積極的傾向) P - - (内面の不安を抑制した防衛的構え)
蟹に見えます (この部分 (d 1) が蟹に見えた。他はまったく関係ない。蟹の角の先に見えた。角を立てた感じ。角を立てた状態である。部分的にそこだけが見えた) d F ± Ad	攻撃性 過敏さ、繊細さ、傷つきやすさ 内面に抑圧された不安 動揺の生じやすさ 不自然な自己中心的・独善的判断	s + EKP (活動的・積極的傾向) P - -, Sch 0 ± · Sch ± 0 EKP (感情の抑圧によって内的パニックが生じており、自我は依存と自立で混乱を招き不安の高まりやすい状態) hy ± · k ± (過度に抑圧しようとして、抑制を欠くことがある)
こうもり (全体ということではないが、羽と目の部分が特にこうもりに見えた。夜行性の動物に見えた。夕方から夜にかけて飛び回る。羽が似ている。) W F ± A P'	過敏さ、繊細さ 隠蔽された高い活動性・敏捷性 現実逃避的傾向 抑うつ傾向 精神的安定を欠きやすい要素 防衛的構え	m - VGP · EKP (現実遊離構え、精神的不安定傾向) C + - (現実から孤立した抑うつ) s + EKP, P - - (内面の不安を隠蔽して攻撃的・活動的状況に逃避しようとしている防衛的構え)

注：EKPと記載があるのはEKPでの反応である。記載がない場合やVGPと記載があるものは、VGPでの反応である。

考察

の因子反応とロールシャッハ法の言語反応を比

事例1から事例5までの5事例のソディ法

較をして一覧表にまとめると以下ようになる。

各事例をまとめて一覧にしたロールシャッハ法 (第1図版反応) とソディ法の対比的要約表

ロールシャッハ法による 言語反応	ロールシャッハ法の 言語反応が意味するもの	ソディ法による 因子反応と意味
何かなあ・・・身体・・・人間の骨・・・ 肋骨みたいく肋骨みたい。組み方 が・・・) dr F干 At	強い不安、強い恐怖感情、心気状 態、強い不安を抑制しようとする 傾向	P±・Sch—+ (罪業・刑罰不安、神経症状態、心 気妄想傾向、体感異常、内面の不 安を抑制しようと緊張する)
何かの虫・・・あと分からん (d3+d5 ツノと頭のてっぺん) d F± Ad	活動エネルギーの低下、 無気力状態、疲労感、精神的退行 状態、意欲のなさ	S0—・S±±EKP・C0+! (不活発、意欲低下、無気力、消極 的、状況依存傾向)
かぶと (ここ出とるし・・・かぶる兜) WS F± Crown	自我防衛、攻撃性の抑圧、 硬い構え 自己保全への独善的な構え 強い男性性の憧憬 保守的で蒼古的傾向	hy— (EKPも同じ)・d—!! (自己隠べい、柔軟性の欠如) Sch++EKP (自己中心的で独善 的な硬い構え) d—!! (強い男性性の抑圧) C0+!・d—!! (古い対象への固着 と依存、保守的傾向)
かぼちゃ!・・・ (半分に切ったところで、ここが(S) 種のところ) WS F± PI Food	口唇愛傾向、依存欲求。	m+ (依存、甘え、口唇愛欲求)
土偶・・・(顔、手、足、これが(S) 目だと思う) WS F± (H) Antiquity	精神的退行、幼稚さ。 古い対象への依存心や執着傾向。 生き生きとした人間への関心の乏し さ。抑圧された不安や緊張。逃避。	m+・S+0・C±0EKP・Sch— Sch±+EKP (依存、甘え、幼稚、退行、内的不 安と緊張、消極的態度、一時的激 情と現実適応への努力)
冠みたい・・・(形が似ている。抜けて いるところが(S)、冠にあるところ とそっくり) WS F± Crown	権威的構え。権威への憧れ。 虚勢、自我防衛的傾向	p+ (VGP・EKP共に)、hy—! (自我拡大的構え、自己隠べい)
蝶ちよ (全体だよ。目とか尻尾。白いの(S) 模様だと思ふし、蝶ちよの柄。向こ うから来るのを見て。大空に羽ば たいている弱ちい蝶ちよ) WS FM±FK A P	幼稚さ、子どもっぽさ 自由な気楽さを求める心情と、孤 立状況や孤独感が示されている。 弱小感、空虚感 不安感や寂しさ ポピュラーな多発反応	m+!・C—0 (依存・甘え) P0—・Sch—0 (小心・心気傾向) h—EKP・S±± (孤立と心的動揺、不安傾向) Sch—0・Sch—EKP(抑制・防衛) S±± (情緒の動揺が表面化) m+! (孤立することへの強い不安)
兎と兎が戯れている (顔、耳、脚。遊んでいるような・・・ 真ん中は、何でもなし) W FM± A	幼稚さ、子どもっぽさ 快樂追求的	C—+!・C—0EKP (情愛欲求・依存欲求)
化け物 (見たくない! 顔みたいな感じ。 薄気味悪い、色が。動物の化け物) WS FC'± (Ad)	強い不安、感情的混乱、焦燥感 生じている恐怖心を回避しようと 緊張している	P±± (感情的爆発の危険性、不安 をはらんだ強迫傾向と緊張状態) C— (現実からの逃避・現実回避)

ロールシャッハ法による 言語反応	ロールシャッハ法の 言語反応が意味するもの	ゾンディ法による 因子反応と意味
島みたいな崖。海にあるじゃん！ 水に影が映っている 〈水から顔を出している島。影が水に映っている。下のほうが少しボケているから映っていると思った。風景は好き。この先っぽから飛び降りて死んだりする〉 W FK 干 Lds	エネルギーの低下 活動力や意欲の低下 現実逃避的 自殺企図の危険性	S00・S±-EKP (エネルギーの低下、消極的態度、気力や意欲低下) C— (現実逃避、目標喪失)

以上のように、5事例を用いてゾンディ法とロールシャッハ法の反応の比較検討を行った。ゾンディ法は言語ではなく因子記号としてその内面の衝動 (Trieb) が表出され、ロールシャッハ法は被験者の言語による表現を記号に変換して解釈し、時には数量化したり、また出現をみた言語をそのまま解釈したりしながら、いずれも被験者の内面に抑圧されている心情を探る投射法心理査定技法である。因子記号と言語反応の基本的な違いはあるが、これら5事例に両者に共通しているのは、内面の不安や無気力な心情のみならず、空虚感や弱小感が示され、またそうした感情的混乱を避けようとする防衛的な構えなどが多く共通して出現している。いずれも不安が高まる状況にあった少年であったことが反映されていると考えられる。

しかしそうした状況を超越して判断しても、ロールシャッハ法言語とゾンディ法因子には、互いが互いの解釈を深めてゆく要素が豊富に存在していることが明らかとなっている。例えば大塚の研究によって明らかにされたように、ロールシャッハ法の「Food反応」はゾンディ法では「m+因子」と関連性があり、心的意味としては依存や甘えなどの口唇愛欲求の表出であることや、今回の調査で明らかになったようにロールシャッハ法の「FM±反応」もゾンディ法では「m+因子」反応の依存欲求であり、かつ「Sch-0・Sch--因子」反応といった比較的良好的自己抑制や防衛反応であり、周囲へ

の依存という背景には、単に依存・甘えといった単純な意味だけではなく、防衛的心情からの自己抑制といった意味が含まれていることが明確になっている。

今後更にこうした調査結果を精査して、詳細な検討報告をしたいと考えている。

なお本論文は、奥野・上芝 (1976) の研究を基礎に加筆し、新たな資料を加えて、まとめたものである。

**Keyword :** ロールシャッハ法、ゾンディ法、反応の関連

**【参考文献】**

Bohm, E. 「Ein Fall von masochistischen Transverstismus im Rorschach-und Szondi-Versuch, nebst einer grundsätzlichen Vergleichung der beiden Verfahren」 Szondiana 1953, I, 9~43  
 奥野哲也・上芝功博 「ゾンディ理論からみたロールシャッハ反応の解釈仮説」1976 日本犯罪心理学会第14回大会発表  
 大塚義孝 「運命分析学よりみたロールシャッハ反応の意義」、『ロールシャッハ研究』IX・X合併号 1968, 201~215頁  
 大塚義孝 「いわゆる精神分裂病における運動反応について—主としてゾンディ的自我心理学の立場から」、『ロールシャッハ運動反応の研究 (宮孝一教授還暦記念論文集)』1968, 131~148頁  
 大塚義孝 『衝動病理学』1974, 誠信書房

